

最後まで頑張れる人間になりたい！

父は、小学校5年生の娘の校内マラソン大会の応援に行った。校舎周りを2周するマラソン大会。体型もポッチャリ型で、決して運動が得意ではない子だったので初めから成績は期待していなかったが、結果は最下位だった。

娘にこう言った。「よくがんばったね。一番輝いていたよ。」娘は喜んだ。

小学校6年生になった翌年、またマラソン大会の応援に行った。スタートの場所に集まる子どもたちの様子を見てみると、自分の娘だけが、ポツンと一人ぼっちで集団の後ろに佇んでいた。

父は思った。(はじめからやる気のない態度だなあ。それでなくても足が遅いんだから、少しでも有利になるように前の方にいればいいのに。本当は走りたくないんだろうなあ。そうだよな、去年はビリだったし。)

結果は、今年もまた昨年同様の最下位だった。

父は娘にこう言った。「今年もよくがんばったね。今年も、とっても輝いていたよ。」スタートの時に抱いた思いは、特に告げなかった。

小学校の卒業が間近になったある日、娘が卒業文集を持ち帰った。中に、小学校の思い出の作文が載っていた。娘の作文のタイトルは『マラソン大会のこと』だった。父は、その作文を読んでハッとした。

「5年生の時のマラソン大会で、私は、校舎の裏のあたりを走っているとき、誰も見ていなかったので歩いてしまいました。6年生になって、今年は絶対に歩かないで頑張ろうと思いました。でも、みんなに追い抜かれると嫌な気持ちになるし頑張る気持ちが減ってしまうので、走っていてしょんぼりしないために、初めから一番後ろで走り出しました。今年も、最後まで歩かないで走れました。そして、タイムも去年よりずっと良くなって、本当にうれしかったです。」

父は、その時に、スタートラインの後方で一人佇む娘の真意を初めて理解した。そして、あの日あの時、あんな感情を抱いた自分を大いに恥じた。自分が抱いたマイナスの感情を娘に伝えなくて本当に良かったと述懐した。

この話は、昨年末に、新潟青陵大学大学院教授の碓井真史先生の講演でお聴きした、先生自身と先生のお嬢さんとのエピソードである。

碓井先生は、全国放送のテレビやラジオにも何度も出演したり、重大な犯罪や事件が発生するとマスコミからコメントを求められるような、言わずと知れた全国的にも有名な社会心理学者である。また、数十年にわたって、新潟市のスクールカウンセラーの一人として活躍していただいている。

実は、私と碓井先生の出会いは、お互いがまだ30歳代の頃に遡る。私が当時勤務していた中学校に、スクールカウンセラーとして年度途中で配置さ

れたのが碓井先生だった。スクールカウンセラーが学校に配置される試みが始まった本当にハシリの頃だった。今でこそ、スクールカウンセラーは全市展開になっていて、教育現場に欠かせない当たり前の存在で認知度も高くなったが、当時は、我々教職員ですら、「スクールカウンセラーって？何するの？」という状況だった。

しかし、全校集会での着任の挨拶は鮮烈だった。演題に用意したスタンドマイクをやおらはずして手に持つと、颯爽と演題の前に進み出た。そして、その軽妙洒脱な底抜けに明るくユニークな話術に全校が引き込まれた。私自身、この人はただ者ではない、と思った鮮明な記憶がある。

さて、碓井先生は、人間が幸福になるには、目標に向かっている段階で、自己肯定感を高めるということが重要であると説いている。同感である。

社会心理学では、自己肯定感を高めるためには、周囲から愛されている実感がある(包み込まれ感覚)、人と話が通じる・わかってもらえるという実感がある(社会性感覚)、自分は最後までがんばれる人間なんだと実感できる(勤勉性感覚)、自分を受け入れ自分を好きになれる(自己受容感覚)、が必要だという。

もし6年生のマラソン大会の後、碓井先生が娘さんに次のように言ったらどうだったろうか。

「また、今年もビリだったね。あんなに後ろの方からスタートして、初めから全くやる気が感じられなかったなあ。もちろん結果は期待してなかったけど、もう少し頑張れたんじゃないの。お父さん仕事休んでわざわざ見に来たのに・・・。」

これで、もう完全にアウトだ。子どもはひどく傷つき、どんなに自分なりに精一杯頑張っても、どうせダメなんだと思ったに違いない。これは、決して人間が幸せになる過程ではない。そうしなかった碓井先生はさすがだ。

素直でいい子、目立ちたくない、横並びを求める、自信がない、劣等感が低い、主体性がない、意見を言わない、空気を大事にする、協調よりも同調、他者を恐れる、失敗を怖がる、例にならう、言われたらやる、特にやりたいことはない・・・。これらは、問題視されている現代の若者像だ。

しかし、子どもたちは、心の底では、自分の個性や能力を生かして、人生を輝かせたい、自分を輝かせたいと思っている。そういった思いをつぶしてしまうのは、本人の努力不足ではなく、時にして周囲の環境だ。

人間にとって最も大きな環境は人間である。子どもの幸せのために、子どもを取り巻くすべての人間の人間力が問われているとあらためて痛感する。

娘が中学時代に部活の大会や練習試合の応援に行った自分も、よく口にしていたものだ。「何で勝てないの？努力が足りないんじゃないの？もうちょっと頑張れないの？せっかく見に行ったのに。」娘も、そんなことを言われる筋合いはないという理不尽さと、周囲の期待に何とか自分も応えなくてはならないという気持ちの狭間で、さぞ苦しんだことだろうと、今更ながら思う。親としても教師としても、自分の人間力のなさを猛省するばかりだ。